

## 大学での学びの経験と卒業後の進路・主観的厚生に関する実証分析

浦川邦夫・姉川恭子

### -要約-

本稿では、大学教育での学びの経験が、卒業後の進路や労働に対する意欲、生活満足度とどのように関連しているかについて、大規模データを用いて実証的に考察した。

過去の先行研究によると、大学教育のあり方そのものが卒業後のキャリアや所得に与える影響は少ないとする見方もある。しかし、矢野(2009)の分析事例にあるように、大学時代の学習経験は知識能力を向上させて現在の知識能力にも有意な影響を与え、結果として所得の向上に結びついている可能性がある。このような経路の存在を矢野(2009)では「学び習慣仮説」と呼んでいる。本稿では、学生時代の学び方が、現在のキャリア形成のあり方や主観的厚生（幸福感・仕事満足感）と実際に関連しているかを検証した。

結果として、大学時代に「学び習慣」を身につけていた者は、世帯の属性や職業の属性を制御した場合も、男女ともに仕事の満足度や全般的な幸福感が高い傾向にあることがわかった。また、男性については、学生時代に「能動的な授業選択」を行っていたものは、現在の労働市場で相対的に高い賃金を得ている。